

巻頭言

梅雨期雑記

蔵 知 毅

うっとうしい梅雨もそのうちに上がることである。今年の梅雨は男性型とか、時間もあった代りに、豪雨もやって来て、かなりの被害も出たようである。麦が収穫期になって雨にやられて、これも相当減収になるし、売物にならないものもできたようである。家畜の飼料にと思ってみても、赤カビが出てうっかり飼料にも使えなくなった。毎年のことながら梅雨期には問題が多いことである。日本本土の位置から来る、宿命的なものであると考えてみても、気分的には何としても重苦しいものである。

田植えのシーズンもどうやら一段落したようである。農繁期に県内を回ってみて驚くことは、耕耘機の普及である。農村は好むと好まざるとにかかわらず、次第に機械化されて行くようである。耕耘機とオートバイがなければ、今時の若い者は農業をやってくれないのである。

岡山県にも遂に大型コンバインが入って来て、麦の刈り取りを行うようになるし、一方ではヘリコプターによる薬剤撒布が行われるような時代になったのである。

馬耕が姿を消し、やがて牛耕も見られなくなるかも知れない。機械力は遂に畜力を駆逐したこともなったのである。和牛も今までは役肉用牛と呼ばれ

ていたが、そのうちに役の字を取り去って肉用牛にならざるを得ないようになってくることは明らかである。

このことは本県の和牛にとっても大きな問題であるが、もう頭の切り替えと、そのための準備をしてもはやくはないようである。生産県であるがゆえに、特にそのことが痛感される。

穀を破ることはむづかしいことであるが、和牛の将来のために諸賢の一行を煩わしたい。